The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中間経路移動表現に見る中国語と日本語の相違について
Author(s)	高, 一波
Citation	日本語・日本文化研究. 2015, 25, p. 66-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54489
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中間経路移動表現に見る中国語と日本語の相違について

高　一波

1. はじめに

移動表現は例（1）のように局面によって起点指向・中間経路指向・着点指向という三つの分類に分けられる。例（1a）（1b）は起点指向、例（1c）（1d）は中間経路指向、例（1e）（1f）は着点指向である。

（1）a.　食堂から出て右にまがると図書館です。

b.　太郎は部屋を出た。

c.　振り返ったら彼はもう橋を渡った。

d.　廊下を走らないでください。

e.　全員が山頂に辿り着いた。

f.　車で東京へ向かうつもりだ。

本研究は、「起点」と「起点指向」というような焦点化される空間場所を初期位置として離れていく移動方向を取る移動事象のことを「起点指向移動事象」と呼び、「着点」と「着点指向」という焦点化される空間場所に向かうような移動方向を取る移動事象のことを「着点指向移動事象」と呼ぶ。それらに対し、起点や着点に向かうなどのような明示的な客観的な方向性を持たない移動事象を「中間経路移動事象」と呼ぶ。また、本研究では丸尾（2005）[i]にしたがって、「走る」「散歩する」等のような移動性を持たずに動作の具体的な様態に注目する移動動詞のことを「様態移動動詞」と呼び、「渡る」「通る」等のような移動性を有する移動動詞のことを「経路移動動詞」と呼ぶ。

中間経路移動事象の場合、中国人学習者による日本語での移動表現では、以下のような誤用がよく観察される。

（2）*初めて新宿の街で（正しくは「を」）歩いていた時、「へイ！！すごい人々ですね」と私はおばあさんに言った。　（寺村（1990:205））

（3）*そして、山の小道で（正しくは「を」）歩いて帰ると、樹齢が二千七百以上の神木を見えたり、春の時に桜の花を観賞したりして、こんな景色は人々に楽しませる。（市川（2010:40））

張（2001）によると中国人学習者がヲ格とデ格を混同しやすいのは母語干渉が原因で、具体的には空間場所を表す際のある程度デ格と共通する“在”介詞構造の影響による干渉だと考えられる。実際中国語にも様態移動動詞と経路移動動詞があり、上述した母語干渉はほとんど様態移動動詞の場合に観察される。しかし例（4）に見るように、経路移動動詞の場合だと用いられないという点では、中国語の“在”介詞構造はと日本語のデ格は共通しているため、その場合において“在”介詞構造が学習者に影響を及ぼしているとは考え

にくい。

(4) a. 我　过　马路　后　再　回　你　　电话。(道を渡ってからかけ直すね)

私　渡る　道　　後　また 返す あなた　電話

b.*我　在　马路　过　后　再　回　你　　电话。

私　“在”　道　　渡る　後 また 返す あなた　電話

また、例 (5) も中国人学習者による誤用である。例 (6) はその文の中国語訳であるが、中国語において「学校に来る」は“来学校”、つまり上述した「動詞＋名詞」という他動詞句のような形式で表現できる。そのため、中国人学習者が日本語で同じ事象を表現しようとする際にも「*学校を来る」というようにヲ格を間違って用いる傾向がある。

(5) *もし学校を（正確：に）来たら、私の宿舎に遊んできてください。

（寺村（1990:203））

(6) 如果 你　来　学校　　的话　　就　　来　我 的 宿舍 玩 吧。

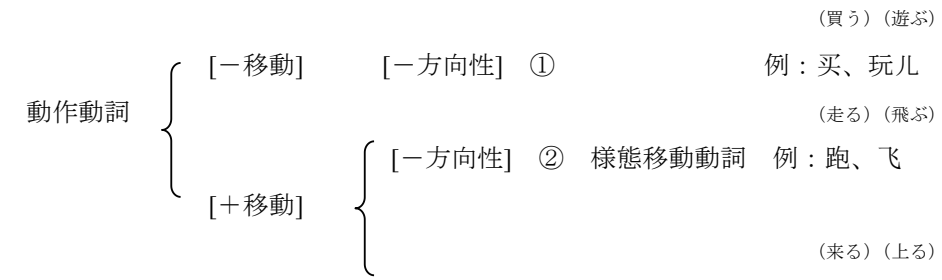
もし あなた 来る　学校　（～たら）順接関係 来る 私 の　寮　遊ぶ　終助詞

このように、日本語と中国語は動詞で移動表現における形式と意味の対応と差異が大きい。本研究は、中間経路指向の移動表現において日本語と中国語の表現形式はどのように対応し、またその差異はどのように意味上の差異に反映されているかを解明することが目的である。

2. 移動性と方向性

丸尾（2005）は「移動」を「時間の経過とともに（主体の）位置変化を伴う行為（丸尾（2005:47））」というように定義し、以下のような文法関係を提示した（図 1 は本来“在＋L（場所名詞）＋V（動詞）”形式での動詞使用制限[ii]を説明するためのものである）。

図 1



（丸尾（2005:95）による）

図 1 では[移動]という意味特徴について明確な定義は述べられていないが、おそらくそれは「移動」の概念（「時間の経過とともに（主体の）位置変化を伴う行為（丸尾（2005:47））」）を表すものである。

しかしここで一つの問題が生じる。方向性がない場合、つまり図 1 のような[－方向性]

の場合は動作動詞のような非移動表現と様態移動動詞のような方向性を持たない移動表現という二つの可能性が存在する。もしそれらを区別するのが[移動]という意味特徴の値というのであれば、[移動]の値をどのように判断するかということが問題になる。[移動]という意味特徴が「移動」という概念から来ている以上、対象が移動事象を表すのであれば[＋移動]であると考えるべきであるが、「対象が移動事象を表す」こと、すなわち対象が移動表現であるということ自体を証明するには[移動]という意味特徴が＋という値を持つことを証明する必要がある。

本研究では「移動性」を「方向性」の上位概念として設け、また「方向性」の他に、「移動性」のもう一つの下位概念として「位移性」を設ける。「方向性」も「位移性」も「移動性」の一種であり、「方向性」と「位移性」を総括した概念を「移動性」と呼ぶ。また移動性を有する表現を移動表現として認識し、その表現が表す事象を移動事象として捉える。

①方向性

本研究ではある方向に向かうことを示す意味特徴を「方向性」と呼ぶ。方向性は前にも触れてきたように二つ以上の空間に関わることを要求する。

また、方向性には客観的方向性と主観的方向性がある。例えば、例（7）（8）は“出”のような方向補語と“离开”（「離れる」）のような経路移動動詞により方向性を示している。それらの移動行為が[起点]とするのは「北京」や「教室」などといった固有な場所空間であるため、その表現における方向性は「客観的」であると言える。

（7）列车 从 北京　　开　　出 了。

列車“从”北京　（交通機関が）移動する 出る 完了

（列車は北京から出発した）　　（『白水社　中国語辞典』）

（8）小明立刻 离开　了　教室。

小明 すぐ 離れる 完了 教室

（小明はすぐ教室を出た）

このような客観的方向性を有する起点指向の移動事象を視覚的に示すと図 2[iv]になる。

図 2

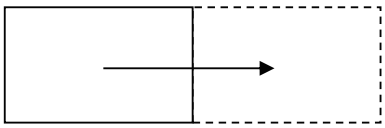
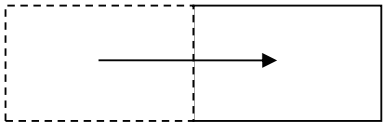


図 2 に示されているように、起点指向の移動表現において移動の起点となる空間領域は焦点化される。また、その移動行為の主体は必ず焦点化される空間領域を離れ、別の空間領域に関わるため、客観的方向性の指向としては焦点化される起点領域からその他の空間領域へ向けられる。

起点指向の客観的方向性の他に、着点指向の客観的方向性もある。着点指向の移動事象を視覚的に示すと図 3 になる。

図 3



一方、固有の空間領域に向けられる客観的方向性に対し、主観的方向性は発話者の視点と関わる。また、主観的方向性の存在は客観的方向性と矛盾せず、同一表現において同時に出現することができる。

（9）他　从 教室 跑 出 去 了。

彼“从”教室 走る 出る いく 完了

（彼は教室から走って出ていった）

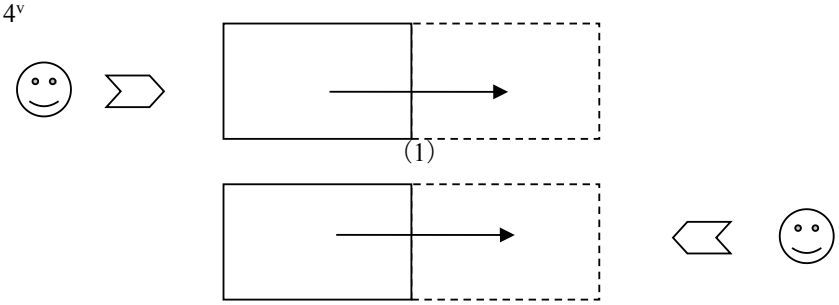
（10）他　从 教室 跑 出 来 了。

彼“从”教室 走る 出る 来る 完了

（彼は教室から走って出てきた）

例（9）と例（10）は起点指向の移動表現であり、客観的方向性としては同じく“教室”という起点領域から別の空間領域に向けられるが、“去”と“来”という方向補語によって両表現における発話者の視点は異なっている。

図 4[v]



（1）

（2）

同じく起点指向の移動表現であるが、例（9）と例（10）はそれぞれ図 4 の（1）（2）が示しているように、発話者の視点すなわち対象事象に対する目線が向けられる方向が異なる。本研究では以上のような発話者の視点による方向性を主観的方向性と呼ぶ。

②位移性

「位移性」とは位置変化を示す意味特徴である。方向性と異なって、位移性において移動の明確な方向は問題にされず、重視されるのは位置変化という事実である。

（11）小河 从 他家　门口 流　过。

小川“从”彼の家 門前 流れる 過ぎる

（小川が彼の家の前を流れる）　（『白水社　中国語辞典』）

（12）汽车在 草原 上　驶　过。（車は草原を走る）

車 “在”草原 方位詞 （交通機関が）移動する 過ぎる

（13）托托…不　去　　追逐 在　它　头顶上飞　过　的 蝴蝶…

トト　しない 動作の方向 追う“在”その 頭上　飛ぶ 過ぎる の 蝶々

（トトは…自分の頭上を飛んでいく蝶々を追おうとせず…）　（绿野）

例（11）（12）（13）では移動主体の明確な方向が示されておらず、方向性が見られない。しかし、例（11）（12）（13）における“过”は動作がある場所から他の場所に移ったり、ある場所を通ったりすることを示す（『白水社　中国語辞典』）による）補語であり、それらの行為に必ず位置変化を伴うことを明示することになる。

位移性は位置変化を示しても必ず二つ以上の空間領域に関わるとは限らない。すなわち言語化の際に焦点化される空間領域の他に、別の空間領域の存在は方向性の場合と異なって必然ではない。そうでなければ例（12）（13）などのような“在”介詞構造を用いる文が成立しないことになる。

このような一つの空間領域としか関わらない場合における位移性を図に示すと以下のようになる。

図 5[vi]

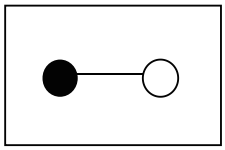


図 5 は単一の空間領域に関わる移動表現における位移性を表す。また、図 5 において二つの位置を繋ぐ線は単にそれらの間にある移動関係（異なる参照点の間に位置変化が起こったという事実）を表しており、線そのものの長さや形などが移動の距離や経路を示しているわけではない。

3. 中間経路移動表現における日本語と中国語の対照

本節では移動性の面で中国語と日本語を対照し、それらの中間経路移動表現の異同からそれらの形式と意味における対応及び差異について分析する。

3.1　一つの空間領域に関わる移動事象の場合

移動事象が一つの空間領域にしか関わらない場合、中国語と日本語はそれぞれ以下のような表現形式を取ることができる。

中国語：“在（zai）”介詞構造

“绕着（rao zhe）”型の介詞構造

日本語：場所を表すデ格構文

様態移動動詞を取るヲ格構文（無規則の経路を取る場合）

その中、中国語の“在”介詞構造の場合、移動事象として認識されるのは位置変化が確実に起こったという事実のみで、移動の経路あるいは軌跡にいたっては問題にされない。その点において、日本語のデ格構文は形式的にも意味的にも“在”介詞構造とほぼ対応し

ていると言える。

一方、中国語における“绕着”はある場所を巡って循環するような移動経路を示す。

（14）a. 王芳 绕着　操场　跑　了　几圈。

王芳 を回って グラウンド 走る 完了 数周

（王芳はグラウンドを数周走った）

b.*王芳 绕着　操场　跑　进　更衣室 了。

王芳 を回って グラウンド 走る 入る 更衣室 完了

（王芳はグラウンドを回りながら更衣室に入った）

例（14b）は“绕（着）”を用いながら主体が他の空間領域に移動することを表そうとする文であるが、“操场”（「グラウンド」）を走り回りながら“更衣室”という別の空間領域に入るということが不可能である。“绕（着）”文の場合を図に示すと以下のようになる。

図 6

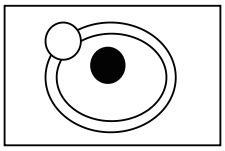


図 6 の二重線は移動関係のみでなく移動経路も示す。黒い丸は例（15）が示すように、ヲ格により標示される場所が移動ルート上に位置しない場合もあるため、ここでは移動主体の初期位置ではなく移動経路の中心となる位置を表す参照点である。

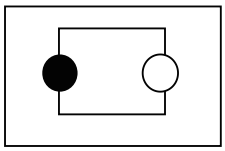
（15）…孩子们　绕着　石柱奔跑。

子供たち を回って 石柱 走る

（…子供たちは石柱を回りながら走っている）　（文化）

無規則な経路を取るヲ格文の場合、移動事象は図 7 のように示すことができる。

図 7



その場合、移動主体の位置変化は焦点化される空間領域内に起こり、他の空間領域に移ることはない。移動関係を示す線は二つの参照点を通って輪になっているが、主体の初期位置と移動後の位置が必ず循環するというわけではなく、あくまで移動行為の範囲が空間領域内に限定されるということを示す。

以上のように、中国語における“绕着”のような介詞構造と日本語における経路移動動詞を取るヲ格構文（無規則の経路を取る場合）については、それらの移動経路の性質によって焦点化される空間領域が制限される点においてお互いに共通している。しかし、中国語の“绕着”型介詞構造は具体的な経路（ある場所を中心としてまわるというような経路）を示すのに対し、日本語のヲ格構文は常識や文脈によって経路が予想される場合があるも

のの形式上は具体的な経路を示さない。日本語において具体的な経路を明示したい場合、通常「をまわって」というような具体的な移動経路を表す従属節を用いる。

3.2　複数の空間領域に関わる移動事象の場合

①直接的に他の空間領域に関わらない場合

移動行為が直接的に他の空間領域に関わらないが次の言語化段階で他の空間領域に移ることが許されるような移動事象を表す場合、中国語と日本語ではそれぞれ以下のような表現形式を用いることができる。

中国語：“从（cong)”介詞構造

“沿（着）(yan zhe)”“顺（着）(shun zhe)”型介詞構造

日本語：経路移動動詞を取るヲ格構文（移動経路が空間領域と重なる場合）

中国語の“从”介詞構造は図 8 のような移動事象を表すことができる。例（16）は場所を限定する“在”を用いる例（13）と表す事象に大きな相違が見られない。

（16）.托托…不　去　　追逐 从 它　头顶上飞　过　的 蝴蝶…

トト　しない 動作の方向 追う“从”その 頭上　飛ぶ 過ぎる の 蝶々

（トトは…自分の頭上を飛んでいく蝶々を追おうとせず…）

その場合、移動事象は空間に制限されず、他の空間領域の存在も許されるが、そのような関わりは言語表現によって明示されていないため移動主体の移動後の位置が必ず他の空間領域にあるとは限らない。言い換えれば、その場合注目されるのは移動主体が他の空間領域に移る前の事象だと言える。

それに対し、“沿（着)”“顺（着)”介詞構造は例（17）のように、空間領域そのものを移動経路として標示するため主体が他の空間領域に直接関わることはないが、その次の言語化段階で移動主体の位置が他の空間領域に移ることが許される。

（17）…帆船 顺着　轻风　缓缓　　航行。

…帆船 に沿って そよ風 緩やかに 航行する

（…帆船はそよ風にしたがって緩やかに航行する）　　（高龙巴）

図 8

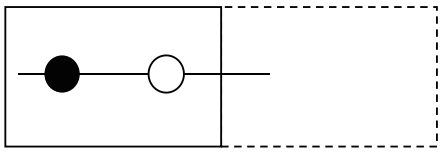
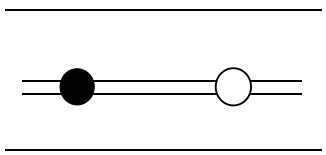


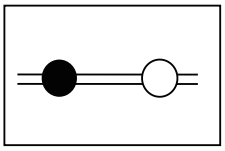
図 9



一方、日本語のヲ格構文は L（場所名詞）が移動経路として V（動詞）にくる様態移動

動詞に支配される場合、図 10 が示すようにその移動行為は焦点化される空間領域に制限されるが、移動自体が継続し、その次の言語化段階において主体が他の空間領域に移ることが可能である。その場合、ヲ格構文は L に対する V の支配によって焦点化される空間領域が移動経路として捉えられ、その点においては中国語の沿（着）”“顺（着）”型の介詞構造と共通しているが、焦点化される空間領域が移動経路と重なる原因はそれぞれ異なる。

図 10



このように、日本語と中国語は共に直接的に複数の空間領域に関わらないが、移動自体が他の空間領域に移ることを次の言語化段階で許すような移動事象を表すことができる。しかし、日本語の場合、次の言語化段階がどうであれ、様態移動動詞を取るヲ格構文によって直接表される移動事象自体は焦点化される空間領域にしか関わらないが、中国語の場合だと、“从”介詞構造はそのまま焦点化される空間領域を越えて他の空間領域に関わる移動事象を表すことができる。

②直接的に他の空間領域に関わる場合

複数の空間領域に直接的に関わる移動事象を表す場合、中国語と日本語はそれぞれ以下のような表現形式を用いることができる。

中国語：“从（cong）”介詞構造

VL 形式（「動詞＋場所名詞」の形式）

日本語：経路移動動詞を取るヲ格構造

中国語において、“从”介詞構造は“翻过（越える）”のみで移動行為を完成させることができず、例（18b）のように“去”のような方向補語を加えなければならない。杉村（2000:157）によると、“来/去”は語彙的意味の働きによって言語化されない移動の終点あるいは起点を表すことができる。それは恐らく“来/去”によって移動行為は必ず異なる空間場所へ移るようになるためである。“从”文は図 11 で示すことができる。

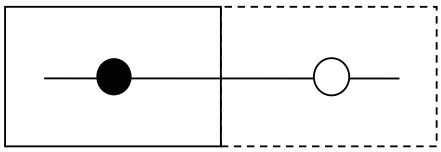
（18）a.??他 <u>从</u>　雪山 <u>翻过</u> 了。

彼“从”　雪山 越える 完了

b.　他 <u>从</u>　雪山 <u>翻过</u>　去　了。

彼“从”雪山 越える いく 完了　　（彼は雪山を越えた）

図 11



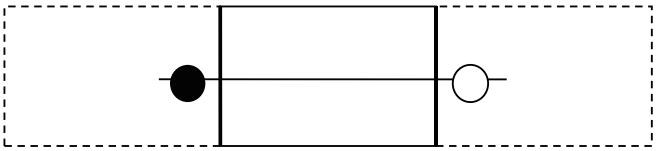
それに対し VL 形式は例（19）のように“翻过（越える）”のみで移動行為を完成させることができる。VL 形式の場合、移動行為は必ず焦点化される空間領域を越えて他の空間場所に関わり、むしろ空間領域を越えること自体が焦点化されていると言える。VL 形式文を図に表すと図 12 になる。

（19） 他翻过　雪山了。

彼 越える 雪山 完了

（彼は雪山を越えた）

図 12



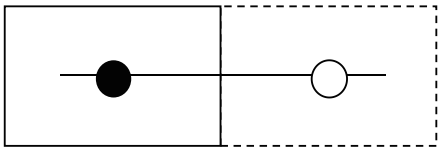
一方、日本語の場合、経路移動動詞を取るヲ格構造（図 13）の場合、例（20）~（22）のように、行為完成後の移動主体の位置は必ずヲ格に標示される空間領域に存在しない、すなわちその場合の移動事象は必ず複数の空間領域に関わる。その点においては中国語の VL 形式と共通している。しかし、VL 形式は主体が他の空間領域から焦点化される空間領域への移動事象を表すことができるが、日本語のヲ格構造は焦点化される空間領域からの移動事象のみしか表せない。

（20）旅人は桜の森の花の下を通った。

（21）彼は湖の上を渡った。

（22）泥棒は階段を上がった。

図 13



3.3　まとめ

本章では中間経路移動事象を表す際の日本語と中国語における各移動表現形式及びそれらが表す意味の異同について考察した。

まず、中国語の“在”介詞構造と日本語のデ格は同じく動作行為が行われる場所を標示する表現形式として､位置変化を伴うすなわち位移性のある事象を表すことが可能である。“在”介詞構造とデ格の異同について考察した結果、それらは最低限の移動性を表すことができるという点において共通しており、形式的だけでなく移動性という意味的な面においてもある程度共通していることが分かった。

次に、中国語の VL 形式と日本語のヲ格構文はそれぞれの言語において同じく他動詞句にも用いられる表現形式であり、その点では両者が形式的に対応していると言える。しかし、中間経路移動事象を表す場合、VL 形式は V にくる動詞に関係なく必ず焦点化される

空間領域を越えるような移動事象を表すが、ヲ格構文はVにくるのが様態移動動詞だと一つの空間領域に関わり、経路移動動詞だと複数の空間領域に関わる。また、ヲ格構文が様態移動動詞を取る際に表すような移動事象は、移動経路が空間領域に沿うものと無規則なものという二種類があり、前者について中国語では“从”介詞構造によって表すことができる。一方、空間領域に沿うものも無規則なものは、“顺（着)”・“沿（着)”・“绕（着)”のような具体的な移動経路を示す介詞構造なら一部の事象を表すことが可能であるが、日本語の場合ではヲ格構文が具体的な経路を明示せずにただ暗示するという点において中国語形式との間に多少差異が見られる。

4. おわりに

本研究は移動性の面から、中国語と日本語における中間経路移動事象を表す表現形式についてそれぞれ分析し対照した。

まず、一般的に動作事象を表すとされる“在”介詞構造とデ格構文は中間経路移動事象を表すに際して動作行為そのものに注目するが、最低限の移動性（位置変化の事実）を表すことができる。“在”介詞構造とデ格構文により表される中間経路移動事象はまさに動作事象と移動事象の境界線に位置するものであると言える。そのような事象を表す際には中国語と日本語においてそれぞれ“在”介詞とデ格を用いて空間場所を標示することができる。

次に、同じく形式的に対応しているとされる中国語のVL形式と日本語のヲ格構文の場合、VL形式はVがLを支配することにより、たとえVに様態移動動詞がくるとしても必ず結果を有するすなわち空間領域を越えるような移動事象を表すのに対し、ヲ格構文はVに様態移動動詞がくる場合に空間領域を越えない移動事象を表すことができる。ここで注意すべきなのは、中国語において“跑操场（グラウンドを走る)”というようにVL形式は様態移動動詞を取りながらも空間領域を越えない事象を表すことができるが、それは恐らくVとLの組み合わせがイディオム化で意味が特定化し一つまとまった行為として認識されるためだと考えられる。その証拠に、“跑（走る)”のかわりに“走（歩く)”を入れ替えると意味不明な表現になる。一方、日本語のヲ格構文は「グラウンドを走る」の他に、「グラウンドを歩く」「グラウンドを飛びまわる」などといった表現ができるようにより高い生産性を有する。

このように同じく他動性を表す表現形式でありながらも、VL形式とヲ格構文ではVがLを支配する際に置かれる注目点が異なる。中国語はVL形式が移動事象を表すに際して他動性により移動における位置変化の範囲が空間領域を貫通しており、すなわち移動行為が空間領域を渡るような形を取るため、移動事象に完了性が求められる。それに対し空間領域を越えない移動事象を表す際には“在”や“从”介詞構造あるいは“绕（着)”のような具体的な経路を表す介詞構造を用いる。一方、日本語のヲ格構文の場合、位置変化の範

囲は移動動詞の性質により決まる。経路移動動詞が V にくると移動行為は焦点化される空間領域を越えるが、様態移動動詞が V にくると移動行為は移動そのものの性質によって空間領域に沿るか、空間領域を越えない前提でその全体を行動範囲として位置変化するかのように経路を取る。

また、様態移動動詞文は一見して無規則な経路を取るが、「グラウンドを走る」では「トラックに沿って走る」ことを、「公園を散歩する」では「公園の道に沿って歩く」ことを含意するように、実際のところ経路が暗示されることがある。このように経路移動動詞と様態移動動詞の場合の相違及び様態移動動詞内部における相違からは、日本語のヲ格構文において V が L を支配することにより移動経路が注目されていることが分かる。それに対し、中国語では“沿（着）”“顺（着）”“绕（着）”などのような介詞を用いて具体的な移動経路あるいは軌跡を表すしかない。

以上のように、中国語と日本語は中間経路移動事象を表す際、たとえ VL 形式とヲ格構文のような形式的に対応するものであってもそれぞれ異なる着目点を有し、焦点化する事象の局面にも相違が見られる。

その他、本研究はあくまでも動作事象と近い関係にある中間経路移動事象を考察対象としており、実際 VL 形式は起点や着点指向の移動事象を表すことができ、ヲ格構文は起点指向の移動事象を表すこともできる。また“从”介詞構造も起点指向の移動事象を表すことができるなどというように、本研究で見た表現形式は中間経路以外の移動事象にも関係している。それらの場合に現れる日本語と中国語の言語表現におけるさらなる特徴を解明するためこれらの問題を今後の課題とする。

【参考文献】

荒井文雄（1992）「移動動詞の意味構造とアスペクト極性」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』14(1)　pp.55-105

伊地智善継（編）（2002）『白水社　中国語辞典』白水社

市川保子（編）（2010）『日本語誤用辞典：外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』スリーエーネットワーク

影山太郎（2001）『日英対照　動詞の意味と構文』大修館書店

川野靖子（2001）「ヲ格句を伴う移動動詞句について―アスペクト的観点からの動詞句分類における位置づけ―」『日本語と日本文学』第 33 号 pp.25-38

杉村博文（2000）「“走进来”について」『荒屋勤教授古希記念 中国語論集』白帝社 pp.151-164

杉村　泰（2006）「イメージで教える日本語の格構文」『言語文化論集』27(2)　pp.53-65

高橋弥守彦（2005）「“走過来”“走過去”の“過”について」『語学教育研究論叢』22 pp.157-187 大東文化大学語学教育研究所

田中茂範・松本曜（1997）『日英語比較選書第 6 巻　空間と移動の表現』研究社

張　麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析　中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク

寺村秀夫（1990）『外国人学習者の日本語誤用例集』大阪大学

馬　建設（1988）「中国語の介詞<在>について」『福井工業大学研究紀要』18号 pp.369-375

丸尾　誠（2005）『現代中国語の空間移動表現に関する研究』白帝社

姚　艶玲（2004）「日本語の「ヲ格＋移動動詞」構文と対応する中国語表現」『比較社会文化研究』第 15 号 pp.129-139）

Jackendoff,Ray.(1983). *Semantics and cognition*. Cambridge, Mass: MIT Press.

Talmy,Leonard.(1985).”Lexicalization Patterns:Semantic Structure in Lexical Forms”. *Language Typology and Syntactic Description,vol. Ⅲ ,Grammatical Categories and the Lexicon,T. Shopen（ed.）*,Cambridge:Cambridge University Press,pp.57-149

Talmy,Leonard.(2000).”A Typology of Event Integration”. *Toward a Cognitive Semantics,vol. Ⅱ :Typology and Process in Concept Structuring*,Cambridge, MA:The MIT Press,pp.213-288

陈　昌来（2002）《介词与介引功能》安徽教育出版社

孟　庆海（1986）　<动词+处所宾语>,《中国语文》第4期　pp.261-266

用例出典：（（　）内は本稿中で用いられた略号）

（高龙巴）梅里美（傅雷 译）1985《高龙巴》人民文学出版社

（绿野）莱曼･弗兰克･鲍姆（陈伯吹 译）1953《绿野仙踪》少年儿童出版社

（文化）余秋雨 2001《文化苦旅》东方出版中心

注

---

[i] 丸尾（2005）では「移動性」と似た意味特徴を「方向性」と呼んでいるが、後で述べる「方向性」とは異なるため注意する必要がある。

[ii] “在＋L＋V”形式での使用について、図 1 の①②類は可能で、③は不可である（丸尾（2005:95））。

[iii] 丸尾（2005）では「方向移動動詞」と呼んでいるが、本研究ではそれを経路移動動詞と呼ぶ。

[iv] 本研究に用いる図形は影山（2001）・丸尾（2005）・杉村（2006）を参考に作成している。

[v] 人の顔は発話者を表し、太い矢印はその目線が向けられる方向を表す。

[vi] 黒い丸と白い丸は移動主体の位置を表す参照点である。二つの丸を繋ぐ線はその間にある移動関係を表す。